

## 第五節 震災からの復興と各種劇団の復活

大地震発生の三ヵ月後に刊行された『時事新報』の付録『大正大震災記』には、震火災の詳細とともに政府における帝都復興院の発足と復興計画の概要が記録される。これに続いて同誌では歌舞伎、新劇、音曲など芸能界の被災と復活についても数頁にわたり報道された。

### 「復活の光に恵まれた芸界」（時事新報『大正大震災記』）

文化の精粹を誇った帝国劇場の絢爛目を愕かす壮麗な建築も、また海鼠壁に櫓の昔を偲ぶ純歌舞伎式の新富座の構造も、みな一瞬の間に灰燼に帰して、ここに帝都の劇場並びに各種の演芸界は無惨にも全滅の運命に陥ってしまった。

時あたかも初秋の劇団を飾る各座の九月狂言は既に準備整うて、さきがけをなす帝劇は、吉例によって一日がその初日であった。幸四郎松助補導の外に寿美蔵亀蔵も参加しての女優劇狂言は『阿漕』と金子洋文作『投棄てられた指輪』と太郎冠者作『賢き馬鹿』で開け、新富座は左団次一派に中車のほか宗十郎加入の顔合わせ、狂言は岡本綺堂作『鬼坊主清吉』と『鎌倉三代記』と松居松葉作『政子と頼朝』と大森痴雪作『里見伊助』で開演と極り、市村座は菊五郎、友右衛門、男女蔵、栄三郎、彦三郎の座付一座、狂言は黙阿弥作『嶋ちどり月の白浪』と長尾豊作『物草太郎』と『伊勢音頭』、また明治座は伊井一派の新通俗劇で開場、

狂言は清見陸郎作『宮古路豊後様』と『仇し仇浪』と伯山口述瀬戸栄一脚色『夕立勘五郎』と据り、本郷座は河合と猿之助の合同劇に源之助が加わり、『敵討以上』と『秋の夜』と『鷺』と『今戸心中』とがそれぞれ上演されることになっていた。

このほか浅草公園六区を中心としてそこにある御国座、観音劇場や常盤座、金竜館、十二階劇場帝京座（公演劇場は沢正一座の賭博事件で休場中）、宮戸座、御園座などの各劇場を始め、三友館、富士館、帝国館、松竹館、日本館、電機館、満盛館、キネマ倶楽部等の各活動写真館ならびに花屋敷、昆虫館、江川玉乗り等の各興行物に至るまで、朔日という物日を書入れて、いづこも平日よりは開場準備を早め、出盛る人を待っていた際の震災とて、場所柄大騒ぎを演じた。・・・

こうして、以前の火災のため復活工事半ばであった歌舞伎座を始め、新富、明治、本郷の五大劇場を持ち松竹の損害額総高は実に一千万円に及び、帝劇は有楽座を加えて時価の損害額六百万円、また市村座は百万円、浅草常盤座、公園劇場等をもつ常盤興行部は百万円の損害ということである。

そして帝劇はすでに復活工事に着手し、来春四月頃までには竣工の予定であり、歌舞伎座もその頃に落成の見込みで、新富座、明治、本郷各座は少し後れて五、六月頃仮設工事を終り、市村座も四月頃竣工の上、菊五郎一座の本興行は六月に花々しく開演する予定である。

代々木にある歌右衛門吉右衛門の邸宅は火災を免れたが、梅幸は住居を焼かれて蔵が助かり、その他左団次、幸四郎、宗十郎、友右衛門、松助、猿之助、八百蔵、亀蔵、鶴蔵、左升、新十郎、芝鶴、長十郎、権十郎、三升、新之助、羽左衛門、仁左衛門および水野好美、石川新水、福嶋清、花柳章太郎、藤井六輔、小森誠等は皆焼け出されて、着のみ着のままという惨めな姿になったのが少なくない。・・・

かくてそれらの舞台を失った東京の俳優は、生活のために、いきおい他に稼ぎ所を求めねばならなくなってきた。そこで仕打側からも発案して、まず大阪で興行を目論んだが、感情やいろいろの事情で一寸行き悩んだが、過半は十一月頃から繰出し、歌右衛門、羽左衛門、梅幸、菊五郎等はいずれも年内一杯はどこへも出稼ぎせず、休むこととなった。

地方興行の先発隊としては、勘弥一派に浪子、房子が加わって新潟方面へ出かけたのが筆始めである。それから震災後東京での一番槍は、十月十七日を初日に五日間牛込会館で、花柳、藤村、小堀、石川等の新派の新進連は旗揚げした復興劇で、『大尉の娘』と『ドモ又の死』と『夕顔の巻』とが上り、罹災民慰安の野外劇には同じ十七日から三日間日比谷音楽堂で試みた沢正一派の『地藏経由来』と『勧進帳』と『高田の馬場』の公演で、それらが東京の劇団に兎にも角にも復興の烽火を揚げた第一声である。①

帝国劇場は三越などとともに文明開化の極致でもあった。「日本国の華をあつめたる東京市は滅びた」とキリスト者内村鑑三は震災直後に書く。「帝国劇場は滅びた。三越呉服店は滅びた。白木屋、松屋、伊藤呉服店は滅びた。御木本の真珠店が滅びた。」災害は奢侈と遊惰に浸る人々に対する神の懲罰なのである。「私は帝国劇場が一ヶ年以内にふたたび開場するとの事を聞きました。東京市はそんな事では真個の復興を期することはできま

① 『大正大震災記』（『時事新報』第一四五〇四号付録）六二一六三頁。

せん。」①

内村を慨嘆させた帝国劇場の、悔悟なき早過ぎる復活を辿ってみる。同劇場による被災後最初の興行は十一月九日から三日間、帝国ホテルの演芸場を借りたヤツシャ・ハイフェッツのヴァイオリン演奏会であった。インダ・アクロンのピアノ伴奏で人々を慰めたのは、シュールベルトの「アベマリア」やヴィニヤーフスキーの「ヴァイオリン協奏曲」とされる。同じ仮舞台で同月松旭斎天勝の一座の奇術、翌月には舞台協会により山本有三の戯曲『生命の冠』などが演じられた。②

#### 震災後の帝劇興行（『帝劇の五十年』）

九月一日の大震災当時、ハイフェッツはバンクーバーにあって、既に日本へ渡る船の船室も約定済みであり、出帆の日も目前に迫っていたので、やむなく彼は予定通りの極東旅行に出発して、まず上海に直行し、同地から帝劇と連絡をとって、演奏会の日取りを十一月九日から三日間と変更した。劇場も帝劇が焼けてしまったので、帝国ホテルのささやかな演芸場で行なうことを承諾してくれたという……

焦土と化した災害都市のどまん中で、この世界一流の提琴家のリサイタルは、最高十円の入場料で開かれたが、その前売成績が全く意外というほどの盛況だったので、ハイフェッツ氏も気をよくして、自分も東京

① 「天災と天罰と天命」『内村鑑三著作集』第四卷、三六五、三六七頁。

② 『帝劇の五十年』東宝株式会社、一九六六年。一一八―一九、一八二―一八三頁。

市民のために義捐演奏会を開きたいと申し出た。ハイフェッツ、ストローク氏、山本専務の三者主催による義捐演奏会が入場料一円均一で日比谷音楽堂に催されたのは、十一月十二日。もちろんこの日も大入満員で、主催者は純益金三千円を当時の震災救護事業に寄付することが出来た。・・・

麻布の南座でも随時東京公演を行うこととし、・・・十三年二月昼夜二部制、しかも月中より狂言を変えて二の替りを出しているが、勘弥に森律子、村田嘉子らの女優陣、それに佐々木積という顔ぶれで、歌舞伎では『一条大蔵譚』『妹背山の道行』『新皿屋敷』、書き物では松葉作の『秀吉と淀君』武者小路作の『桃源にて』それに太郎冠者の『クレプトメーニア』と『執心の鬼』などが上演されていた。が、つまるところ災害都市の多くに受けたのは、たっぷり笑いあり涙ありの太郎冠者の二作品だったという。・・・

改築成った〈大正帝劇〉は十三年十月二五日に幸田露伴加筆、平山晋吉作『神風』を第一の狂言として幕をあけている。出演俳優は梅幸、幸四郎、宗十郎、勘弥、松助などに再来の梅蘭芳。梅蘭芳は『神風』その他の歌舞伎芝居の終ったあとで、相変わらず大受けであった。二五日から翌十一月四日までの短期公演でこれは終わっているが、連日開幕前に主なる専属男女優が舞台に並んで、帝劇再開場の御挨拶を観客に述べた。・・・開場の年でかなりの話題になったのは、十一月の第二回の歌舞伎興行に『二人道成寺』が出、福助（五世）の白拍子花子、栄三郎の同じく桜子という配役で、当時の好敵手だった若女形同士の張り合った競演が、東都の福助ファン、栄三郎ファンを大いにキャアキャアいわせたことであろう。・・・

大正十三年四月帝劇が復興中だったので、宗之助はかわれて四谷・大国座に出演、『壺坂』のお里その他に妙技を見せていたが、七日目の舞台で動脈硬化症のため突如として倒れ、お里役の扮装のまま三六の若さ

であの世に去った。帝劇が受けた最初の技芸面の損失だったといっている。①

市村座の有望な若手であった沢村宗之助は、新劇勃興にも熱意を抱き、自由劇場第一回公演では左団次の相手役に抜擢された。明治四四年歌舞伎座からの尾上梅幸に呼応して、彼は明治座から帝国劇場へ移籍したのである。復興公演大国座における宗之助の急死は、同家の家庭教師であった沢村貞子の自叙伝にも言及される。宗之助の次男雄之助、のちの个性的な映画俳優伊藤雄之助が、このとき五歳の初舞台であって、父親の悲運な最期に居合せた。

#### 「名優の悲劇的な死」（沢村貞子著『貝のうた』）

帝劇の大幹部、初代沢村宗之助さんのところから、こどもたちの家庭教師にきてほしいという話があったのは、ちょうどそのころだった。宗之助さんは頭のいい近代的な俳優で、立役、女形ともにこなし、「これからの役者は学問をしなければならぬ。新しい風を入れなければ、やがて、歌舞伎はほろびていくだろう」というのが持論だったという。・・・一週二回、長女文恵、長男恵之助、次男雄之助、三男敏之助さんたち四人の予習復習のために、私は学校の帰りに上野桜木町の沢村家へ寄った。月謝は四人で二十円、夕食のほかに交通費五円を支給された。いちばん勉強熱心だったのは次男雄之助さんだった。どんなことでも納得の

いくまで質問した。・・・

私が沢村家へ通いはじめて何ヵ月かたったある日、宗之助さんは突然、四谷の大国座の舞台で倒れた。『壺坂靈驗記』のお里に扮して、幕切れ近く谷底へとびこんだまま、二度と立ち上がれなかったという。死因は高血圧だった。

まだ若いこの名優の悲劇的な死は、すべての歌舞伎関係者とその愛好者たちから痛惜された。役者というものは、その死とともにすべてが失われる。書いた本も描いた絵も残らない。そのからだ一つが資本であり、会社も工場もその肉体のなかにあるのだから、子孫にゆずりわたす何ものもない。未亡人とそのこどもたちが、今後の歌舞伎界で生きる道はけわしく、きびしいに違いない。葬儀ははなやかだった。飾りきれないほごのたくさんの花輪、莊重な読経、参列する有名な歌舞伎役者を一目みようと思わがる町の人たちを眺めながら、私は役者の一生というものをぼんやり考えていた。

美しく賢い未亡人は、亡夫の遺志をついで、こどもたちを教育したいということで、私はその後も、私の学生生活の終わるまで、この家族の引越す先きざきへ家庭教師として通った。毎週二回、ほとんど休まなかった。①

歌舞伎座は二年前の火災で壊滅し、再建半ばで大地震に襲われた。「(大正)十年十月三十日の朝」と梨園の

① 沢村貞子著『貝のうた』五六―五八頁。

長老、第七代市川中車は誌す。「突然電気室の天井から漏電発火して、さしも日本一を誇った檜舞台の大劇場が、なんとわずかに四十分の間に灰になってしまった」。松竹ではただちに再建を構想して一年以内の落成を期し、中車らは関西の劇場へも出勤する。「悪い時には悪いことが重なるもので」、「あの大震災のために、すでにその半ば以上も出来上が」り、「場内に積み込まれてあった榎材の全部を焼き尽くし、竜骨の梁は飴のように曲がってしまつて、大損害を蒙った」①。こうした歌舞伎座の様相が、河原崎長十郎の書簡によって、ドイツ留学中の土方与志に伝えられたことは、前述のとおりである。

のちに長十郎と前衛的な劇団「前進座」を結成する中村翫右衛門は、自宅で昼食に大地震に襲われた。人形町、日比谷、日暮里、さらに那須へと脱出する被災記録は詳細であるが、ここでは演劇の復活に努める部分を参照する。

震災の苦悶と演劇の復活(『人生の半分―中村翫右衛門自伝』)

劇場はほとんど焼けて、麻布の末広座が残っているだけと知れた。麻布で中車氏・片市氏が始めて芝居をやったのは、十月はじめか、九月末かはつきりしないが、なんでも市民は熱狂して迎えて、大満員だった。これまで、もうこの焼野が原では芝居など見るものはないし、劇場はないし、不景気は襲うだろうし、地方

① 市川中車著『中車芸談』(『日本人の自伝二〇―市川中車・中村鴈治郎・市川左団次』平凡社、一八九一年。

でもそれぞれこの負担を背負うから、当分見込みはないと、気の早いものは廃業したもののさえある。人心が芝居どころでない。こんなときに芝居なぞやったらなぐられる。こう一般に考えられていた。こう一般に考えられていた。もちろん私もそう思った。ところが事態は反対だった。

動揺し、混乱し、不安定な人心にとって、心の糧は絶対に必要なだった。もう芝居なぞ見られないだろう、この有様で、どうして復興し、どうして生活していけるか。こういう暗い人心に、焼野が原でも芝居はやれる、見られる、ということは、今後の生活のゆくてに大きな確信を与えることだった。

もう一つはすすんでくる人心をやわらげ、人間生活の楽しさを回想し、人に対する愛情を取戻す力となった。食糧を得ることが第一だが、それといっしょに心の食糧も困難なときほど求めているものだとはじめて知った。この場合には映画とちがって、機械の必要もなく、人間が出ていってすぐ演じることのできる演劇は、大きな力を発揮した。野天でもやれることも知った・・・

十月になって帝国ホテルの舞台で慰安会を催すことになり、歌右衛門はいきつをし、出し物は板東三津五郎・福助師の舞踊、二人狸々と決まり、私は酒売りの役を演じることになった。衣装、かつらはつけずに、黒の紋付き、袴でつまり袴躍りの形式でやることになり、私は躍りの振りを三津五郎氏や三津之丞氏にならした。私としては破格の大役なのだ。震災後始めて舞台に立った私は、胸のとどろきを感じるのだ、それはよろこびなのだ。

観客は場所柄だけ固定していたが、その雰囲気は温かく、観客自身が焼跡のなかのはじめての舞踊として感激的な気分にあひたっているのだった。私は舞台に立って、精神傾けてつとめた。私も焼跡のなかでこんなにも早く舞台に立てたという感激にあひたっているのだった。この催しは大成功だった・・・

大正十三年一月は麻布末広座が明治座と改称して大劇場としてスタートをきった。大劇場は全部焼けてしまったのだから、大幹部の出演する劇場がないのだ。浅草の松竹座がそれから後に開場されたのだが、まずこの山の手の明治座に歌右衛門一座が出演することになった・・・

今年は恐ろしい震災の記憶をとり去ろうと、人々は復興、復興！という声で名実ともに塗りつぶそうと努力した。復興事業は急がれ、焼跡にバラックが建てはじまり、内部に抱えている社会矛盾が解決されないまま、その上を人々は生活をたてるために血眼になってかけまわっていた。この自分すいといん屋のバラック店が多くできた。終戦後中華そばが多くできたようなものだ。

劇場建設はとくにスピードで行われた。一月末には四谷の大国座が開場された。帝劇の人々が出演した。宗十郎・宗之助・勘弥というメンバーだった。三月には観音劇場と本郷本郷座、赤坂演技座、五月には浅草常盤座、下谷市村座、七月には本所寿座、人形町には日本劇場初開場、丸の内の邦楽座、十月には丸の内帝国帝国劇場、すさまじい勢いで劇場が復興した。これは人心安定の政策と、国民が復興に従い慰安を求める現れだと見られる。

三月、四月は同じ麻布明治座で猿之助一座と帝劇の女優連との合同劇の公演だったと思う。私も参加した。桐一葉、初瀬浪子の淀君、森律子のかげろう、猿之助の銀之丞、村田嘉久子の乳母、私は茶道珍伯・・・また、浅草松竹座へ歌右衛門・吉右衛門一座で出演した。歌右衛門の浅草進出はこれが初めの終りだった。

岡本綺堂作勾当侍だでて、私は足利方の源内とかいう敵役をつとめた。①

公園劇場へ辛うじて戻った新国劇団員は、避難した上野でも危険が迫り、警視庁での再度拘留は免除されながら、震災第一夜は本郷の路上で、第二夜は小石川の広馬場で仮寝する。数日間転々とするなかで、食物を提供したり、日用品を届けてくれる知己や友人もあった。被災者があるいは哀悼し、あるいは慰藉しながら、まもなく彼らは復興を支援すべく、野外劇実施の準備に着手する。

### 復興公演決行の壮図（沢田正二郎著『苦闘の跡』）

六日目にまた私たちは、焼けずに残った一高前の依藤君の家へ引きかえしていった。秋の朗らかな日が続いて、帝都の焼跡には早くも復興気分が漲って来た。人はバラックを建てて、自己の職業にいそむべく急ぎだした。・・・ある人はここにバラックを建てて住むようにと私に勧めた。けれども私は考えねばならなかった。―自分はいま、住むべき家のことを考えるときではない。不自由ながら友の家のささやかな二階の一室に雨風を凌いでいる。食うものも腹をへらさない程度には食っている。―私には私のバラックを建てる前に、まず自分の天職について考えなければならない義務があった。・・・

私は依藤君と僅かな花束を携えて、焦土の巷を終日歩き続けた。人が面を掩うて去る屍の山に、黄色い煙に煤けた痛ましい屍の山に跪いて、いつまでもいつまでも礼拝した。この人々の断末魔の苦しみを自分の身

① 中村翫右衛門著『人生の半分―中村翫右衛門自伝』筑摩書房、一九五九年。下巻、八九―九〇、九八頁。

にひしと味わって、この人々がこの世に残した思い事の幾分でも果たそうと誓い祈るのだった。この日々の勤めは、私たちのこれからの演劇の生命に、どんな大きな覚悟を与えただろう。そんなら私たちはこの難に際してまず最初に何を為すべきであるか。

世の中の生業の中に、演劇ほど社会生活、人間生存の上に密接なる関係をもっているものはないであろう。私はこの演劇を鑑賞する人々の豊かな心持に抱かれて、今日まで生長して来たのである。今も私には安住の前に奉仕がなければならぬ。私たちは一日も早くこの荒れに荒れたる帝都に、演劇の楽園を築かねばならぬことを知ったのだ。あらゆる支障を排し、あらゆる困難をくぐり、私の怨みも仇も打ち忘れて、朗らかな秋の日に帝都幾万の人々に心の安けさを与うべく、働かなければならぬ義務を感じたのだ。この企てのためにはいかなる苦痛、いかなる恥をも忍ばなければならないと思いついた。

こうして富まざる身も心の富に補われ、また疲れた体も心の輝きに励まされて、雨の日も濡れそぼちながら、晴れたる日にはその濡れを乾かしながら、街から街を飛び廻った。私と同じ心をもった人々は、この貴い企てのために特志を捧げて、あるいは遠くから馳せ参じてくれる人も数多かった。しかして、この涙ぐましいほどの努力は、あらゆる人々の諒解を取得して、在帝都の各新聞社後援、劇作家協会賛助、国民文芸会主催の名のもとに、十月十七、八、九日、三日間の野外劇となって現れた。そしてこの催しはいとも晴れやかなる秋の日に、晴れやかなる数万の人々を迎えて、なんの故障もなく、目出度く震災後第一声の晴れやか

なる終りを告げたのであった。①

### 帝都復興を祈る大野外劇（新国劇編『新国劇五十年』）

向島の沢田の家も焼けたが、東京の劇場もほとんどが焼けてしまった。本拠の公園劇場も帝劇も歌舞伎座の、新富座も明治座も本郷座も市村座も、みんな跡方もなく消えてしまつて、演劇人はみな茫然自失の状態に陥っていた。

沢田は一面焼土と化した帝都の野に立つて「そうだ野外劇をやろう」と肚を決めた。新国劇を愛し、育ててくれた東京市民への謝恩と慰安のための芝居をやろうと。この事は、沢田は生きてゐる、新国劇は健在である、という報告にもなり、象潟署事件の潔白の証拠にもなることだった。場所は結局、日比谷公園の新音楽堂を舞台に利用することに決まった……

演し物はいろいろと検討した結果、久米正雄作『地藏経由来』、歌舞伎十八番『勧進帳』、長田秀雄作『高田の馬場』と決まった。衣装や小道具は、大阪へ疎開していた浜田たち一部の座員が関西で整え、担いで持ってきたりして準備は着々と進んだ。

ところが、今度は『勧進帳』の狂言のことで一部から、故団十郎の十八番物を冒瀆するものだど横槍が入った。しかし、沢田は「今回の興行は勿論入場は無料で、期日は三日間。それも震災で働く意欲を失った人

### ① 沢田正二郎著『苦闘の跡』一六三―一六五頁。

達に、明日への希望と心の糧を与える為で、一個人の利得の為に行うのではないから、必ずや故人（団十郎）も地下で私の行動を喜んで下さるに違いない。だからたとえあなた方が許されぬといわれても私はやります」と、遺族の人達の前できっぱりいきった。彼は芝居道の封建社会のなかに棲息していき、なんの理由もなく傲然と他の俳優を見下すその考え方に、思わず反発したので……

今回の計画を知って主催、後援、賛助をかつて出してくれた国民文芸会、在都の各新聞社、劇作家協会の連中が、湯浅警視總監やその他の当局者に懇請してこの運動を盛り上げた。その甲斐あって、さしも難行に難行を重ねた野外劇は世論の力でついに許可を得ることが出来た。

あとは公演期日の決まった十月十七、十八、十九の三日間をなんとか好天気で終わらせたいということだけであった。それと不思議なことに、歌舞伎の立唄、立三味線、鳴物として聞こえた長唄界一流の人々が、大勢参加を申入れて来たことだ。その数は無慮百余名に達したので、一日では到底並びきらず、三日間にわかれて出演して貰うことになった。この一事をもつてしても、一部の反対などはますます無意味なものとなつたわけだった。

さて日本演劇史上燦然と輝く、日比谷公園音楽堂に於ける大野外劇は、絶好の秋晴れのもとに正午の号砲を合図にその幕を開けたのであった。日比谷公園へは早朝から人が詰めかけ、開演数時間前から数万の観衆を迎えて、たちまち満員となつてしまった。①

### ① 新国劇編『新国劇五十年』六三―六六頁。

病後の身で震災の惨禍に直面して水谷八重子は、義兄水谷竹紫に導かれ、新派の花柳章太郎や小堀誠とともに神楽坂の復興公演に参加した。沢田正二郎の野外劇とともにこの企画は、演劇復活の先駆と称讃される。これに自信を得て竹紫は島村抱月と松井須磨子に因む第二芸術座の結成に着手し、十九歳の八重子を中心に、青山杉作や友田恭助を団員に迎えた。かくして震災第二年の二月と四月牛込会館で第二芸術座の公演が挙行され、この時期には小山内薫による築地小劇場創設の準備も進みつつあった。

### 復興公演から第二芸術座へ（水谷八重子著『女優一代』）

やがて焦土の東京が「帝都復興ええぞ、ええぞ」という歌声とともに、ノミの音、槌の音とともに起き上がった十月のはじめ、義兄は牛込会館を本城に〈演劇復興〉の狼火をあげることを私に打ち明けてくれました。私の健康も震災を境にめっきり恢復していたのです。

それから義兄は文字通り東奔西走、十月の十七日から一週間の公演の日取りを決めました。出演は花柳章太郎、小堀誠、石川新水、藤村秀夫さんなど新派の新劇座の方たちが中心になり、その中に私も加えていたのです。ちょうどそのころ日比谷の音楽堂で沢田正二郎さんの新国劇が、十五日から三日間『勧進帳』のページェント公演を取行され、はからずも二か所で演劇復興の狼火があがることになりました。

牛込会館は神楽坂の中段にあり、舞台の間口が三間半、奥行きが二間くらい、ちょうど寄席をひとまわり大きくした程度の小屋でしたが、なにしろ震災後最初の芝居ということで、横浜や千葉、埼玉あたりから

駆けつけて下さったお客さんもあって、大変な盛況でした。

だしものは『大尉の娘』『ドモ又の死』のほか瀬戸栄一さんの『夕顔の巻』の三つ。私は『ドモ又の死』と『夕顔の巻』の難妓に出演いたしました。衣装や小道具はなに一つ揃わないので、私や義兄の着物はおちろん、神楽坂の芸者さんからも着物、帯、持ちものまでお借りするという状態でした。楽屋で顔を化粧しながら、ふと窓の外を眺めますと、お客さまが入り口から遙か神楽坂の肴町停留所近くまで延々と行列をつくって、開場を待っておられるのです。開場後も、入場出来なかった方のなかには「横浜から歩いて来たんだからみせてよ」と入り口で嘆願している女性もあり、いまさら芝居とお客さんの結びつきの強さを感じさせられました。

一方この公演の成功で自信を得た義兄は、私を中心に芸術座再興を決意、着々とその準備を進めて行ったのです。しかし、いまにしている思いますのに、この芝居の成功が今日の私を形づくったのだということです。それは、その後青山先生や友田さん、田村さんが築地小劇場の創立に参加したとき、私も義兄の反対を押しかけて、参加できなかったわけではありませんでしたが、この芝居に出ている間に、私の気持に変化が起きてきたからです。

震災という大きな逆境にもかかわらず、ひたすら芝居を愛して下さるお客さん方の、切実な感情とジカにふれあった感激、それが強く身体にしみこんで、私はもっと幅の広いお客さんと芝居を創っていきたくて願う気持でいっぱいになったからです・・・

そのころ島村先生の遺族の方から「八重子さんも成長したのだし、劇団をつくるなら芸術座を名乗っては」というおすすりめもあったので、義兄は汐見洋さん、友田恭助さん、田村秋子さんに応援を求めて、芸術座を



再興することになりました。

もちろん中村吉蔵先生、楠山正雄先生をはじめ、義兄の知己の方々は、まだ二十そこそこのこの私を看板にしては荷が重いと忠告や反対をされ、小山内薫先生、土方与志先生先生の築地小劇場建設も軌道にのり、いずれは私も参加するものとみられていただけに、もっと先にした方がいいのではないかという声もあったようです。しかし、義兄の決意は堅く、ついに翌十三年二月牛込会館で旗揚げをいたしました。

その時のだしものは、有島先生の『ドモ又の死』、イブセンの『人形の家』、小寺融吉先生の『真間の手古奈』で、出演者は汐見さん、友田さん、田村さんのほかに室町歌江、松井きよさんが参加して下さいました。私は『ドモ又の死』で友田さんの画家の恋人、『人形の家』のノラ、『真間の手古奈』で手古奈をやりましたが、いずれも好評でうれしいスタートをきりました・・・

第二回目の公演は四月に再び牛込会館であけました。だしものはアンドレーフの『なぐられる彼奴』。第三回がシヨオの『武器と人』、長谷川如是閑先生の『喰違い』の二本で、出演者は前回と同じメンバーでした・・・

しかし、この公演を最後に、青山先生、友田さん、田村さん、汐見さん、東屋さんは築地の創立に参加してしまわれ、私は独りぼっちになって、随分と淋しい思いをいたしました。①

① 水谷八重子著『水谷八重子―女優一代』四一―四五頁。

上山草人の近代劇協会へ大正七年入門した伊沢蘭奢は、四ヵ月後に『ヴェニス商人』で初舞台を踏み、その後も有楽座での公演で経験を重ねる。翌年上山は渡米してハリウッド入りを果し、近代劇協会は解散した。この間蘭奢は生活の資を得るため、内藤民治の総合雑誌『中外』の新聞記者としても努めた。彼の紹介によって彼女は新劇協会の畑中蓼坡に紹介されて、その第一回公演に花柳はるみら等と共演し、松竹の蒲田撮影所にて映画十三本に出演する。

大正デモクラシーを背景に女性の自由と自立を求める気運が高まるなかで、厨川白村著『近代の恋愛観』で称揚される恋愛至上主義や、雑誌『青踏』に掲載されるエレン・ケイの自由恋愛論が、家族制度の因習に縛られる多くの人達を惹きつけた。婚家を離れた伊沢蘭奢と病妻を支える内藤民治はやがて恋仲となり、大森の借家に愛の巣を営む。大地震の日被災を逃れて蘭奢は芝に転居したが、三ヵ月後身辺に予期せぬ事態が生じた。

かねて内藤は進展する政治情勢の渦中にあった。大正八年米騒動のあと彼は吉野作造等と黎明会を結成し、発刊した『中外』には山川均、堺利彦、伊藤野枝などが寄稿する。その翌年革命を成就したソビエトロシアの承認を推進し、東京市長後藤新平と使節アドルフ・ヨッフエとの会談を支援した。ヨッフエ夫妻を送る送別会には、病床の内藤夫人に代えて、伊沢蘭奢が出席したとされる。震災後内務大臣に就任した後藤新平は、北洋漁業の正常化のためソビエト政府との交渉を決断し、日魯漁業の社長たる内藤にもモスクワへの出向を突如要請した。

### 自立への決意と復興公演（伊沢蘭奢著『素裸な自画像』）

わたしたちは最初からお互いに自由な、解放された独立人としてお互いを拘束するようなことなく、二人の間に生れ出た一つの愛をもち育て、不完全なお互いの個性をつきあわせて、一つの完全な人格をつくり出そうという考えまで持っていました。・・・Nは青年時代に偉人後藤象二郎の同志であり、追随者であった諸橋田龍という人の門に入って、漢籍、詩歌をを学んだとかで、文学に深い趣味があり、志士の気分を多量に持っていました。彼は二十歳の頃アメリカに渡って十年あまりの苦学をつづけ、あちらの大學を終えた後、ニューヨークの某新聞の全欧特派員として数カ年欧州各国を旅行していたくたいでしたから、酸いも辛いも嘗めつくした苦勞人でした。・・・

わたしたちの関係はどこまでも〈自由の心〉を基調としておりましたが、わたしにとってのNは、それよりもっともつと深い、複雑した心情の対象でありました。彼はわたしの愛人であると同時に兄であり、親であり、師でありました。Nは世間にまま見受けるように、圧制的に尊大な態度で臨むようなことはなく、あらゆる場合に自ら反省し、よく自己を解剖し、批判しました。反対にわたしがあり来たり女性の因習に囚

### ① 「内藤民治回想録」『論争』一九六二年十二月号、論争社。一八一―一八八。

〔参照〕夏樹静子著『女優X―伊沢蘭奢の生涯』文芸春秋社、一九九六年。

われたり、粗笨な判断に流れるような場合には、必ずわたしの自覚を呼び起し、彼みずからをたしなめるのでした。・・・

それは暮れの二七、二八日の頃のことでした。身の毛のよだつような怖ろしい震災のどききも、いつとはなしに鎮まって来て、生き残ったわたし共もまずまず無事で年越しが出来ようと、不足勝ちな中にも〈生き延びた喜び〉をお正月に期待していました。ところが突然「ロシアへ行く、それも明日早速出発する」とNが言い出しましたので、わたしはびっくりしてしまいました。・・・

Nは、国体の相違は兎に角国際政局の上からも観ても、日本の経済立国の上から考えても、シベリアの広い土地と富源を包蔵するロシアと提携しなければならぬと言う見解を持っておりまして、真に国を愛する政治家や、ロシアに理解あるお歴々たちと日露××協会を組織していました。そして、国民外交の舞台に上って盛んに活動しておりました。・・・

その晩わたし達は、丁度田舎から出て来ていたわたしの母と三人で、青山の〈いろは〉で簡単な晚餐をしたためながら、しばしの別れを惜んだり、留守中の相談をしたりしました。猪口をいくつか重ねたNは、ほんのり上気した目元に元気の好い光りを湛えながら、抱負を語ったり、国交回復に対する確信を述べたりして、不安がるわたしや母を慰め励ますのでした。

〈いろは〉を出たわたしは、冷え冷えする冷気に思わず顎を襟巻きに埋めました。露地を出ると、小さな片割れ月が皎々と青山墓地の森の上空に凍りついていました。わたしは思わず、「まだ無政府状態だ」ととりどり噂されるシベリアの長い鉄路や、雪に鎖されたモスコの空を連想したりしました。・・・

鮮人騒ぎや暴動の噂が納って、帝都再建の勇ましい合言葉がバラック造りの槌の響と調和して、市民の胸

に安堵と希望を与えていたとは言え、・・・一人ぼっちで残されたわたしは謎の国、スフィンクスの世界に吸い込まれていったNの後姿を、寂しさに誘いこまれるままに想い浮べては、生別が死別になるのではないかと妄想するのです。寂しいうちにもお正月のおもちを祝ったわたしは、新劇協会が一月十日から仙台座で『西の人氣者』その他を上演することになりましたので、舞台稽古やなんかで寂しさを紛わすことができました。

壊滅の後を受けた帝都は、夜を日について建設を急いでおりました。閑暇の産物だと言われる芸術などはほとんど眼にもくれなかったのですが、心ある人々の中には芸術の建設的意義や、生活と不可分の本質を説き始めておりましたので、わたしなどもそれに共鳴して、こんな時こそ芸術本来の使命を発揮しなければならぬと、ひそかに心懸けたのでした。それだけにまた励みが出て、Nが国家のため一命を捧げるならば、私もまた今度こそ芸術のために献身しようと決意しました・・・

Nの手紙にはモスコウでの情況が手に取るように描かれていました。「一週間前から要路の大官を歴訪して、それぞれ専門的に交渉を進めている。チチエリン外相と会見した最初の時は夜の十一時半であった。他の国が百年かかることを、一年で仕上げる意気込みだ。(中略) 僕等は国賓として待遇されている。日露交渉は北京において××公使とカラハン氏の間に再び開かれるまで予備交渉を終わったのである。日露××会が近く外務省の幹旋で、別に支部を開設することになっている。文部大臣ルナチャルスキーも非常に好意をもって迎えてくれた。彼は昨夜ボルショイ・テアトルに『ファウスト』を案内してくれた。革命の混乱期に、こう砲撃せんと、よく芸術が毀損されずに保有されたかと想うほど、立派に整理されてある、赤衛軍がモスコウの攻略に際して、クレムリンを包囲した時、ロシア人の憧憬からモスコウが消え去ってしまふことを力

説して、レーニン、トロツキーの間を往来し、芸術的殿堂の保存に努めたのもル氏であった。」・・・

Nが事業が第一だという心理こそ、男の本当の気持でしょう。いいえ、そうした大きな社会的の生活に較べれば、恋愛などはごくごく社会性の狭い、むしろエゴイズムの結晶にすぎないーとNの持説を肯定する気持と一緒に、劇団人としての自分の天職を持ちながら、恋愛中心に泥み勝ちな自分の薄志を自嘲する気持が起きてきました。自嘲はやがて自己叱咤となりました。そしてわたしは沢田正二郎さんなんぞが、初日が開く前には、一週間くらいは徹夜して稽古をなさる時もある、というようなことを想いだすのでした。

Nの帰国は長引くばかりでした。桜が散ってツツジの便りがチラホラ新聞に現れる四月下旬になって、またまた二、三ヶ月は延びるという通知が届きました時には、わたしはもう驚きませんでした。・・・傍らにもいない、またいつ帰って来るかもわからないNへの愛着から解放されて、自分の時間を自分の芸術のために完全に捧げよう。わたしは六年前、夫のもとから飛び出したときの〈生き生きした生活〉を再び喚び起しました。淋しさを忘れる気持からでなく、いよいよ真剣になって自分自身を掘り下げる生活へ猪突するようになりました。

灰燼の中から蘇った新劇協会は、更生の意気をもって一回毎に目覚ましく進出していました。それにプロレタリア劇壇が台頭しかけていた頃でしたから、そうして新興新劇運動の動きは、わたし達の立場を絶えず刺戟せずにはおりませんでした。五月になってから、新劇協会は帝国ホテルで第六回の公演をやりました。出し物はチェホフの『桜の園』でした。

ロシアの農民生活をテーマに取り入れた筋は、どんなにわたしの心を動かしたことでしょう。貧しい人々、虐げられた人々の生活を、自分の変転極まりなかった過去、ほかの女優さん達のように豊かなきらびやかな

服装や持物などを対照して、毛系の襟巻を無難作にひっかけている現在の自分と思い合せては、むしろ悲壯の快感を呼び起し、またかつては華やかな功名心へのみ煽られていたことを浅はかに想われてきました。①

#### 伊沢蘭奢略年譜（大地震前後）

大正十二年 浅草御園座の沢村源之助、先代訥子的一座に加入し、井上正夫氏、水谷八重子氏とともにシャトリアン作『ペルス』を上演して、市長の妻に扮したとあり。震災後新劇協会は第四回公演を十二月二日より二三日まで、渋谷・九頭龍女学校の講堂に開催す。シング作『西の人気男』の後家クインとストリンドベリイ作『犠牲』の長女アデルに扮す。読売新聞の倉若生より「蘭奢君の顔には中世紀風の品がある。この人は柄もあり、顔立もよいが、身体にまだ味が足りない」と言わる。

大正十三年 一月十日より十二日まで仙台座にてチェーホフ作『熊』の未亡人、『西の人気男』の後家クイン、『犠牲』の長女アデルに扮す。二月十六日より十七日まで帝国ホテル演芸場にて『西の人気男』と『犠牲』を再演す。五月二日より六日まで帝国ホテルの新劇協会第六回公演にチェーホフ作『桜の園』を上演し、ラーネフスカヤ夫人に扮す。金子洋文氏より「熱と暖味の不足を感じたが、夫人の寂しい一面と優しい一面をよく生かしていた」と評される。同月二四日より四日間渋谷聚楽座にて『西の人気男』と『熊』を、つづいて『桜の園』を上演す。十月二三日より二五日まで新劇協会第七回公演に久米正雄作『帰去来』のお

① 伊沢蘭奢著『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』一〇二―一〇五、一七四―一七七、一八五―一八六頁。

さへと岸田国士氏作『チロルの秋』のステラに扮す。前者は新小説の岡栄一郎氏より「三幕目の世話女房は逸品である」と言われ、後者は「この人はいかなる役に分しても、決して破綻を来した事のない貴重な熟練した手腕をもっている。脚本次第で立派な舞台を見せる」と評さる。十一月日本橋劇場の兄弟座に客演し、市川鯉三郎氏等と鈴木泉三郎氏作『山芋秘譚』の海野きくに扮す。十二月より新劇協会は同志会館と毎月興行の約成る。その第一回には武者小路実篤子作『張男最後の日』の夏子と岩野泡鳴作『閻魔の眼玉』の鈴木に扮す。①

中村屋相馬黒光をパトロンとし、秋田雨雀に統率される先駆座は、麴町の土蔵劇場が、震火災で破壊されたため、第二回を大正十三年四月、早稲田大学のスコットホールで行った。演目として秋田雨雀作『水車小屋』とアナトオル・フランス作『運まかせ』、それにストリンドベルヒ作『仲間同士』が供され、花柳はるみや柳瀬正夢がここに参加する。『秋田雨雀日記』にはこうした公演の経緯が逐一記録されとともに、震災後における諸劇復活の状況も言及された。演劇復活の大局を述べる『雨雀自伝』の一文を併記する。

#### 震災後における先駆座の復活（『秋田雨雀日記』大正十三年抜粋）

一月九日 午後一時から浅草の沢田（正二郎）の招待でアメリカ屋に集まった。山本（有三）、鈴木（善）、

① 「伊沢蘭奢フロニカ」『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』三四九―三五〇頁。

藤井、仲本、清見、額田、能島、菊池（寛）、小寺、北尾、金子（洋文）の諸君が来た。四時から『日蓮』と『震災余聞』と『忠次』を見た。沢田の書いた『日蓮』は面白くないものだ。言葉を妙に古風にしたものも面白くない。菊池君のは通俗哲学しかないつまらないものだ。『忠次』は馬鹿げていても面白い。

二月十一日 晴。温かい。半日床の中にいた。寝ていると武藤さんが来たので、二人で（第二）芸術座の『ノラ』を見た。（水谷）八重ちゃんのノラはなんといっても若すぎる。『ドモ又』は新派のよりはいいが、綺麗すぎて貧乏アチリエの感が乏しい。

二月十二日 夜スコットホールで未来社の試演を見た。『内部』は思ったより成功していた。芸術座の時より面白かった。舞台装置もあのとき寄り数等いい。芸術座の時は全く実在感がなかった。

二月十七日 十一時に青山斎場の平沢君の告別式へ行く。代表員達の悲壮極まる弔辞、むせかえるような香の煙、人いきれ、一憤激の中から生まれてくるセンチメンタリズム―組合旗の剣先の物凄さ―弔歌がどこからともなく、地獄の底の方からとつとつと沸き上がってきた。

三月十五日 〈新演芸〉から頼まれて、浅草の観音劇場へ守田勘弥を見に行く。

三月二三日 小雨のち晴。午後一時から神楽坂倶楽部で先駆座の顔合わせをした。花柳（はるみ）、運天姉妹、室町歌江、金子の女連も集った。俳優は大体揃いそう。稽古の時間が短いので、余程みっしりやらなければならない。顔合わせの後、川添、佐藤、小林の三君と共にスコットホールの舞台を見に行った。あのホールは実にいい感じだ。あのホールを時々借りてなにか継続的にやりたいものだ。

三月二八日 佐藤君と二人でスコットホールに金森主任を訪い、四月二四、二五、二六の三日間借りる約束をした。二四日の昼はアナトール・フランス八十年生誕祭をする。

四月一日 夜、芸術座を見る。ショウの『ブルンチール大尉の世界観』―如是閑の『高等曾我延家』

四月二日 スコットホールに先駆座の稽古にいった。『演劇新潮』に『骸骨の舞跳』が出た。

四月三日 スコットホールの先駆座の稽古に行く。関井という女優さんが新たにきた。『演劇新潮』は発売禁止された。『骸骨の舞跳』のためではないかと思った。

四月四日 スコットホールの稽古に行った。ストリンドベルヒを呼んだ。明日から花柳君が出るはず。ストリンドベルヒのベルタをやることに決定した。

四月五日 スコットホールへ行く。今日は花柳君と運天さんの妹さんも出てきたので、女優が全部揃った。ストリンドベルヒと『水車小屋』を稽古した。

四月七日 スコットホールの稽古。中村屋から稽古の室を貸すという返事がきた。

四月九日 今日から新宿の中村屋で先駆座の稽古をした。中村屋の主人がきて親切に話してくれた。ストリンドベルヒとアナトール・フランスと『水車小屋』をやった。このふうでいくと、きつと物になりそう。

四月二一日 先駆座稽古。今日はじめて芝居に自信が出来た。『水車小屋』にはなお工夫の余地がある。花柳君の科白のとき、ポーズを置くこと、笑いを長くつづけることに注意。赤子の泣声、小鳥工夫。宣伝がかなり広くゆき渡っていいようだ。

四月二四日 暑い。スコットホールへ行き、道具の制作に手伝った。夜中村屋の〈夢を語る人々の会〉でストリンドベルヒの第三幕目と『水車小屋』をやった。みんな喜んでくれた。

四月二五日 風、雨。不安な一日。芝居で頭がいっぱいだ。警視庁検閲済みになった。神経を疲労しつづけた一日。スコットホールで半日働いた。『水車小屋』の道具が面白くない。柳瀬（正夢）君がこないの

みんな困った。東洋大学の学生が背景をつくってくれたが、面白くないので悲観した。『運まかせ』と『水車小屋』だけを舞台稽古にした。明日『水車小屋』の道具を変更すること。

四月二十六日 よく晴れた。昨日の風雨を心配したがよく晴れた。芝居のことが気になるので、十一時ごろスコットホールへ行く。柳瀬君のデザインを土台にして『水車小屋』の舞台を作った。構成派ふうの舞台にした。今度はよさそうだ。ストリンドベルヒの舞台もよくできたので安心した。夜、驚くべき感激 アナトオル・フランスもよかった。『水車小屋』もよかった。言葉に非常な力が生まれてきた。ストリンドベルヒの花柳君のベルタは実に立派だ。今夜はじつに愉快な力強さを感じた。

四月二十七日 晴。今朝はかなりよく眠れた。連日の稽古で身体が疲れていたのに、この二日間で頭がめちやくちやにさせられた。『運まかせ』はあれよりよくはなりそうにないが、ストリンドベルヒは稽古をすればするほどよくなりそうだ。ストリンドベルヒのレアリズムを研究してみよう。二日目を五時半に開けた。見物は昨日と同じ位だ。友人や新聞社の人達が多く来てくれた。『水車小屋』は今日は一番いい出来だ。電気も申分ない。柳瀬君のデザインはいい。言葉もますます自然になった。ストリンドベルヒはもともとよくなる。

四月二十八日 晴。スコットホールへ行き、あと片づけをした。戦場のあのような乱雑さがある。芝居に関係して以来、今度のような喜びを感じたことはない。佐藤、川添、佐々木、小林の他、東洋大学の諸君も手伝ってくれた。夜六時からカフェ・プランタンで先駆座慰労会を開いた。同人のほか、花柳、室町、関井、松井の女優連もきた。全員二十名、愉快的な無邪気な一夜を過ごした。ストリンドベルヒの日本に於ける最初の

成功と確信していい。①

### 震災からの復興と演劇の再建（秋田雨雀著『雨雀自伝』）

関東大震災は大きな傷あとを日本の社会に残したまま、一步步記憶の世界へ過ぎ去っていった。しかし、いつでも耳を澄ますと、どこかで人々の泣き叫ぶような声がしていた。人々はちよつとした物音にも強い衝動を感じた。一旦京阪やその他の地方へ逃げのびた人々も、そろそろ東京へ帰って来た。復興！復興！という声は機械的に響いている。内包した矛盾をそのままにして、日本の社会は復興事業に急いでいる。ロームの廃墟のような東京の焼土の上に、バラック建が一通り立ち並んでいる。すいとんや安てんぶら屋の店がバラック建のカフェに早変わりしたり、そばやの店が半分土間になって、円テーブルに椅子が並べられたり、子供洋服の店や石油コンロの屋台店が毎日のように殖えていったりした。そして動物の焼けただれたような臭気が、砂ほこりといっしょになって植民地のようなバラック建の上を吹き捲くっていた。その中の人々は血走ったような眼をして、そのくせどこか浮わついたような足どりでぞろぞろ歩いていた。これが大震災の翌年の春ころの東京だった。・・・

大きな社会激動の直後に来る芸術が、詩および演劇であることは、ロシア革命の場合によっても証拠だてられているが、震災直後に起った芸術は、日本では演劇の復興であった。沢田正二郎は震災前から浅草で芝

居をしていたが、この年の一月にはブラック建の劇場で『国定忠治』『日蓮上人』および『震災余聞』の三つの作物を上演していた。沢田は前にも記したように、表現力の強い俳優であったが、生活態度の英雄主義的傾向から、次第にファッショ的になっていった。この傾向のテンポを早めていったのはやはり大震災火災による自然的・社会的脅威であった。このころの沢田正二郎は、すっかり『国定忠治』になりすましていた。私はこのころ佐々木孝丸、佐藤青夜、川添利基などと先駆座の仕事をにつづけていた。この座は最初小ブルジョアの演劇研究者の集団であったが、土蔵劇場の試演後大震災に逢い、この年スコットホールにアナトール・フランスの『運まかせ』、ストリンドベルヒの『仲間同士』および私の『水車小屋』をやった。舞台装置は柳瀬正夢であった。この演劇研究のグループは、劇場商業主義に対する反対を標榜し、エレオノーラ・ジョーゼの言葉を引用して All or Nothing（凡てか無か）のスローガンを掲げていた。しかし、このスローガンのかげに既に二つの対立した力が動いていた。一つは社会的なものであり、他は芸術至上主義的なものであった。前者は後ではトランク劇場、前衛座等のプロレタリア演劇の創立の要素となった。

小山内薫はこの年、築地小劇場の旗揚げとともに華々しい活動を開始した。この劇場は、若き演出家であり、出費者である土方与志との芸術的協力によって創立されたもので、その第一回の公演はゲーリングの『海戦』によってはじめられた。これは文字通りの『海戦』であった。小山内は自由劇場の失敗いらい長く休火山的芸術生活をつづけていたばかりでなく、この演劇行動によって再びその存在を認められ、またその敵をある程度まで屈服せしめたという感じがした。小山内と当時の論敵との対立は、小山内の芸術至上主義と小

ブルジョワ的通俗主義との対立であったと私は理解している。

①